

手話の民間語源の発生の歴史的検証—「ありがとう」の例—

神田和幸 民博

はじめに

手話には実に民間語源が多い。その理由の1つは手話に文字がなく、手話辞典以外の文献がほとんどないこと、またその手話辞典も聾学校内の教師向けのものであったことが原因で広く世間に知られていないことがある。一方で、民間語源が広がったのは、手話通訳養成が始まった1963年以降に、一般向け手話辞典や手話講師たちが、語源よりも手話の学習しやすさを優先し、昔の手話形を知らないまま現在の手話形から起源を想像し広めたことによる。実際、手話民間語源が複数存在するようになるのも、手話普及運動の時期と一致する。本論では、使用頻度が高く一方で民間語源が流布している例として「ありがとう」他について、語源の変遷の具体例を示すと共に、他の民間語源例を示し、手話形の変遷と民間語源形成の過程の一般法則の仮説を提唱する。手話の民間語源が広がったのは、手話通訳養成が始まった1963年以降に顕著である。それは一般向け手話辞典や手話講師たちが、語源よりも手話の学習しやすさを優先し、昔の手話形を知らないまま現在の手話形から起源を想像し広めたことによる。実際、手話民間語源が複数存在するようになるのも、手話普及運動の時期と一致する。本論では最古の手話辞典とされる「聾啞教授手話法」(明治35年)、全国的に流布した「わたしたちの手話1」(昭和44年)、最も広く手話語源を搭載している「手話の知恵」(大原省三)(昭和62年)を比較し、その変化過程と、変化の構造を示す。

1. 手話の歴史的文献の掲載語彙

下記は代表的な手話文献である。見出し語数は日本語ラベルなので重複がある。

	文献名	出版地	見出し語数*
1902	聾啞教授手話法	鹿児島	528
1959	手話I・II	京都	737
1963	日本手話図絵	東京	886
1963	手話辞典	大阪	1990
1964	手まね入門	大阪	153
1967	手まねと言葉の葉	北九州	469
1984	イラスト手話辞典	東京	約4000
1987	手話の知恵	東京	146
1998	九州の手話	九州沖縄	147
2005	実用手話辞典	東京	約3000

表1 日本手話の歴史的文献

最小が 146、最大が 4000 であるが、搭載語数の多いものは同一手話に別の日本語ラベルに別の日本語ラベルがついている可能性が高い。本論では歴史的変遷がテーマであるから、最も古い「聾啞教授手話法」(1902)と最も新しい「実用手話辞典」(2005)と語源解説である「手話の知恵」(1987)を次に比較する。

2. <ありがとう>の手話

まず現代形を見てみよう。



<ありがとう>

語源として「勝ち力士が賞金を受け取るときに切る手刀から。ただし手話では叩くのは1回」と解説されている(下線部筆者)。これが現在一般的に普及している手話形であり語源である。

ところが「聾啞手話教授法」に<ありがとう(難有)>は<請願>に同じとされている。

<難有>請願ニ全シ

そこで<請願>を見てみると次のようになっている。

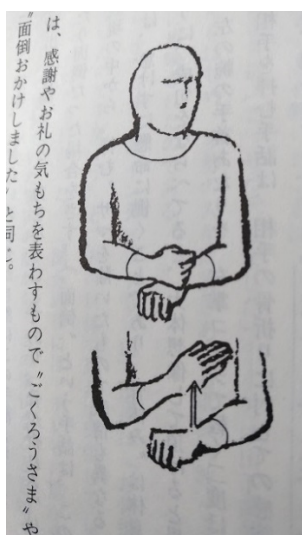
<請願>拇指ヲ上ニシテ右手ヲ上ニ出シ頭ヲ下グルト同時ニ手ヲ少シク上下ス

これは「どうも、どうも」という仕草に似ている。叩くという動作はでてこない。しかし似たような意味の<御苦勞様>は以下のように記述されている。

<御苦勞>腕ヲ前ニ出シ他ノ手ノ拳或ハ平手ノ側方ヲ以テ叩クト同時ニ頭ヲ少シク下グル(足勞ノ時ハ足ヲ叩ク)

現在の<ごくろうさま>は拳しかないが、当時は平手も用いていたし、頭を少し下げることが必要であった。また<ご足勞>という表現もあったことがわかる。

次に中間段階である「手話の知恵」をみてみよう。



<ありがとう>

大原は次のように説明し、自説を展開している。

<ありがとう>

ごくろうさま、お骨折りでした、面倒おかけしました と同じ (p247)

(“面倒”という手話は、この“ありがとう”の手話表現の中から“拝む”サマを除いたもので表情も異なる) (p.248)

左の腕の手首あたりを、右掌コブシで軽く二度ほど叩いたあと、その掌を開いて相手を拝む手話は、相手の骨折りに対しての感謝の表示。(ibid)

自らの腕を二度ほど叩くのは相手の骨(労力)をいたわっているサマなのである。(ibid)

因みに、このありがとうの手話源を、大相撲でかった力士が、行司の差し出す軍配にのった賞金を貰う瞬間の手刀とする説もある。一般言語社会で、一つのコトバに数々様々な語源がにぎやかに揃っているように、手話の世界でも当然いろいろあっても良いというのが私の考え。(P250 下線部筆者)

ただ、この“手刀説”の場合、右掌のコブシとせず、掌を縦にしたものを左掌(甲を上向にして平らな掌の上を)に二度ほど弾く動作をする。そしてこれが今の若い人たちに広まっているありがとうであるが、私のように年をとっていると、古くから伝わっている手話が敬語的な表現に感じてならない。(P250 下線部筆者)

時の流れは言葉のテンポを疾める如しで、手話もこの激流に逆らえず巻き込まれ、変形していくのであろうか。(P251)

大原は「お骨折りでした」という意味の起源が腕を叩く、骨を折るという動作であると考えている。そして「聾啞教授法手話」では別々であった<請願>と<御苦労>が1つになったと考えている。また「手刀説」にある現在の手話形について、「敬語的な感じがしない」という感想も述べている。つまり左手が拳から平手に変化したという。そして図解では、左手が拳になっている。しかし大原よりも古い聾啞教授法手話では右手(他の手)の形は拳あるいは平手となっており、大原の主張は正しくない。恐らく大原はこの文献を知らなかった

のであろうし、彼が昔使っていた手話が拳であったことが原因だろうと推測される。そのせいかどうかは不明だが、図解では叩く時の動作で左右の手の形が異なっている。

以上の過程をまとめると

1. 古い手話では〈ありがとう〉と〈お願い〉が同じで、〈ごくろうさま〉は別であった。〈ごくろうさま〉の手型は拳と平手があった
2. 大原の時代に〈お願い〉と〈ごくろうさま〉が合成された。右手は平手に統一されたが、左手は拳がそのまま残された。〈ごくろうさま〉の手型は拳に統一された。
3. 叩く回数について、聾啞教授手話法には記述がない
4. 大原では〈ごくろうさま〉で2回叩く。
5. 現代では〈ありがとう〉の叩く動作は1回（〈ごくろうさま〉では2回）



〈ごくろうさま〉

現代形では〈ありがとう〉と〈ごくろうさま〉は手型も叩く回数も異なるので明確に識別できるようになっている。別語彙なのである。古手話である聾啞教授手話法でも〈ありがとう＝請願〉と〈御苦勞〉は別語彙であったが、大原の時代に〈ありがとう〉に〈ごくろうさま〉の意味が付加され、2語が1語に合成された。そのため手型と動作回数に混乱が生じた。

この変化過程を見る限り「手刀説」は明らかに後付けの説明、民間語源である。現代の〈ありがとう〉の両手は平手、〈ごくろうさま〉の両手は拳の手型で統一されている。これは手話によくみられる音韻変化である。〈ありがとう〉で叩く動作が1回なのは〈お願い〉との関係である。昔の〈請願〉は小さな上下動であったものが、大きな上下動に変化したため回数が減ったと考えられる。「勝ち力士が賞金を受け取る時に切る手刀」という現代の語源は誰かの捏造であろう。大原の左手が軍配を表すというのも後付けである。実際に相撲の賞金を受け取る姿を見ればわかるが、賞金の帯を切るしぐさは下、左、右と3回であり、その時左手は下げたままである。軍配を持っているのは行司であって力士本人ではない。手話教育ではこうした民間語源が「覚えやすい」「再現しやすい」という視点から利用され、それが「先生からそう習った」という権威性をもって拡がるが多く見受けられる。

本稿の最後に、大原の手話変化に対する意識を紹介しておく。

3. 大原の感慨

戦後昭和二〇年代になって、それまでの封建的なものから脱皮への合言葉で、あらゆる分野にゆきわたった新風により、手話の世界も大きく変貌したことによる。大正末期、昭和初頭から普及されだしたろう学校の口話教育により、それを卒業したろうあエリートリーダー群によって、従来のいわゆる“てまね”から徐々ながら口語体の“手話”へと移行したことに起因する。

そして昭和四〇年代となるに及び、手話を学ぶ一般健聴者も急激に増え、口語体による手と口の同時表示手話が盛んになると、伝統の“長男”は長い男に変身、いつの間にか全国標準語と成りつつあるが、いくら時代の波とは云え、果たしてこれで良いものであろうか。(P30)

明治十年代になり、東京や京都で、ろうあ者の教育が始まったとして、義務教育制のない時代なれば、当時のろうあ学生のたいていは、江戸幕末期生まれである。(二十才入学、三十才卒業というのも珍しいことではなかった) (p133)

ぐっと下って明治三十年代となり、ろうあ学校がいくらか増えたとしても、その教師や府警はほとんど江戸時代の人と考えてよい。

江戸中期を史家は“爛熟と頹廢を表裏に貼り合わせた時代”と表現しているが、これより後の江戸後期の文化が、手話の創造に大きな影響を与えていることには間違いない。(P134)

明治のろうあ者で教育の恩恵を受けた者は極くわずかで、幸運にも、ろうあ学校に入れたものは、商人の子か地主の子のように経済的なバックのある者と、士族や高官で、それも教育に熱心な階級層の子息であった。

彼らの幾人かは、入学前すでに家庭教育による予備的な知識、学問を実に漬けていたし、年令も多感な少年期から青年期に至る青春に富む頃であった。(中略) (p135)

如何にしたらろうあ者間は当然、対健聴者との間でも気軽に意思伝達し語り合えるか。その手段方法が先決問題となった。従来のモノマネ的な身振りだけでは物足りなくなった。

(中略) (p136)

(いろはかるたなどの) 貴重な資料がたちまち揃う。

あとは国文や漢文に詳しい教師の自発的参加と、町のものしり御隠居さんのボランティア精神。かくして、それぞれの熱意と善意の積み重ねでスタートした手話の開拓史なのである。

(下線部 筆者)

まとめ

大原はここで初期の聾教育について重要な発言をしている。

- ・ 口語体による手と口の同時表示手話 (日本語対応手話) 全国標準語となった
- ・ 初期の聾生徒は成人がほとんど
- ・ 生徒は裕福な家庭出身で、知識があった

- ・聾者間と対健聴者との意思伝達
- ・国文や漢文に詳しい教師と聾生徒との熱意

この見解は現在の聾学校の姿から一般にイメージしている聾学校とはかなり異なる。大原は「てまね」が古手話で、昭和40年(1965年)以降の現代手話は日本語対应手話と言っている。筆者は必ずしも大原の見解に賛同するものではないが、手話の大きな変化が聴者との交流が増えた55年前から始まったという見解は傾聴に値する。もし大原の記述が正しければ、手話は聾生徒と教師とが始めたということになる。正確にいうと

- ・てまねの時代(聾学校ができる以前)
- ・初期手話の時代(明治・大正の聾学校で発生)
- ・全国標準手話の時代(聴者との交流が増えた)

の3期に分けられる。これは筆者が主張する以下の分類に合致する。

1. 家庭手話(ホームサイン)
2. 学校手話(スクールサイン)
3. 地域手話(ローカルサイン)
4. 全国手話(ナショナルサイン)

この分類は使用者の行動範囲の拡大により社会範囲が変化することを示す。